

二十回生 樺山(三笠) 翠

筑紫野をひたすら西へ茶の咲いて

冬ぬくし小さき叔母の背ナを抱き

次はいつ来るかと同はれ時雨れけり

庫裡の口沙羅の冬芽の天を指す

嵯峨菊の御所ご用達の格に咲き

新巻の吊るされ父母のありし頃

十二月の午餐赤ワインにて乾杯

柚子一つ我ひとり湯に遊びぬて

葱匂ひたら句筵くむしろの所帯めく

やぶ椿赤心の紅深くして

影一つまとひて椿落らにけり

病む友に見送られぬて春寒し



まんさく

混沌の世にまんさくのらざれけり

ひそやかにひめやかに祈り懸想文けそうぶみ

懸想文主宰の卓に置まれて

千里山で59年続く俳句結社「雨月」については「千里山今昔展を
拝見して」の中で簡単にご紹介しましたが、会場で戴いた今年の
2・3・5月号には 樺山さんの句が多数掲載され、又句会の幹事
も多く務めておられ、ご活躍の様子が窺えました。

お許しを得て「雨月」より一部を掲載させて戴きます。 編集部